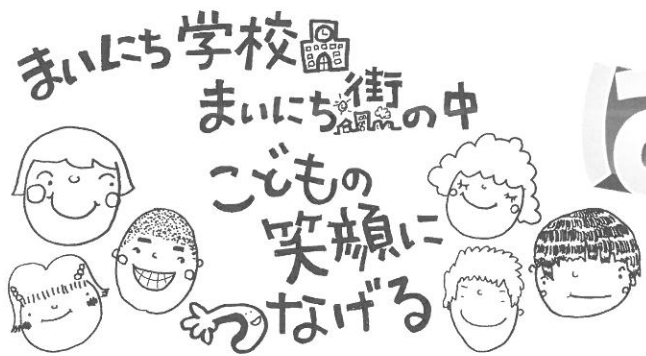




箕面小学校 国際理解教育
コップを頭にのせる フィリピンのダンス

げんげのとは：れんげ草が生い茂った草原のこと。れんげ草は、茎が地に臥して広がり、春になると蓮の花に似た小花を咲かせます。また、れんげ草は緑肥として大地を肥やします。蓮に似た小さなれんげ草を、子どもたち一人ひとりの尊厳に見立てて、それが一面に花開く様子をイメージしました



フィリピンの衣装
「どう?にあってるでしょ。」

- | | | |
|-----|---|-------|
| 特集1 | ・部落問題学習 渋染一揆 | … 1 P |
| | ・司書さんのおすすめ本 『あなたが世界を変える日』
今久保 綾子さん（彩都の丘学園 学校図書館司書） | … 2 P |
| 特集2 | ・箕面市人権宣言20周年学習会 | … 3 P |
| 連載 | ・知ってる? 市民のちから さんかくひろば | … 5 P |
| | ・考えてみよう 「カラッポの街 カラッポの学校 カラッポの…」
かわの ひでたださん | … 6 P |
| | ・わたしの人権教育 雪吹 博さん（箕面市立中小学校） | … 7 P |

わたしの人権教育

箕面市立中小学校 雪吹 博

私は、四年前から通級指導教室（中小学校では、サポートルームと呼んでいます）を担当しています。その教室には、いろんな課題を抱えた子どもたちが近隣校から通って来ます。例えば、体をバランスよく使えないために体育が嫌いな子、ひらがなが読めなくて音読を嫌がる子、落ち着きがなくて授業中にいつも注意される子、聞くことに集中できなくて説明を聞きのがす子、コミュニケーションが苦手な子など。通級の子ともたちの多くは、学校生活のいろいろな場面で困っていたり、自信を無くしたりしています。

中小学校では、一年生を対象にひらがなの清音の学習が終了した六月末、「ひらがな聴写テスト」を実施しました。その結果、ひらがなの読み書きが極端にしんどい

Aくんのことがわかりました。担任の先生に聞くと、国語の読み書きの時間は自信無さそうな表情をしているとのことでした。そこで、七月の懇談会でひらがなカルタを紹介し、夏休み中にお家で楽しみながら覚えてもらうようにお願いしました。

二学期に入り、Aくんの読み書きのしんどさがかなり緩和し、以前と違って「ひらがな」を嫌がっていない様子が見られました。Aくんに、「夏休みにカルタしたの」と尋ねると、「あれでひらがな覚えてたよ!」と笑顔で返事をしてくれました。「もうちょっと、しっかり覚えようか?」と声をかけると、「うん!」。そこで給食準備の時間をつかって、プリントを使用した書字の練習や、なぞなぞを自分で読んで答える音読

と読解の練習を毎日十分間程度、通級教室で指導しました。その結果、一ヶ月程すると、清音はもちろんのこと、拗音や促音まで読み書きができるようになりました。Aくんの場合、文字と音のマッチングがスムーズでなかったのが、視覚的なカルタの絵を介することで、文字と音がつながったのだと思います。A君は「もう大丈夫。」と言っていました。お母さんの連絡帳に「読まなかった本を読むようになった、苦手なカタカナも『あれ、なんて読むの?』と聞くようになりました。」と書いてくださいました。

短期間でこのようなはっきりした成果が現れるのは極めて稀なことでした。一年間指導しても、目に見えるような成果が出ないこともたくさんあります。私たち通級担当者は、子どもたちの困っている状況を少しでも緩和し、教室で自信を持って笑顔で過ごせることを目標に指導しています。そして、様々な課題を持つ子どもたちの多様な個性やニーズに合う学習方法をさがすために、日々試行錯誤を繰り返しています。

お詫びと訂正

はじけるところ35号において左記の誤りがありました。ここに修正させて頂くとともにお詫び申し上げます。

目次・1P・2Pの中で (元箕面市助役・元箕面市人権啓発推進協議会会長) (誤) 芝 寅 雄 → (正) 芝 寅 勇

人権教育推進会議情報誌 『はじける ころ』

発行 箕面市人権教育推進会議
箕面市教育委員会 人権教育課
TEL 072-724-6921 FAX 072-724-6010
e-mail: edu.jinken@maple.city.minoh.lg.jp
平成26年(2014年) 1月
人権教育推進会議委員

八木晃介 河野秀忠 井原芳朗 細谷明代 若狭千絵 藤井朋子 上田晃江 若狭周二
石井順子 山口和子 中西庸介 佐藤秀昭 森崎直幸 宮本美能 永田千砂 松岡淑子



●箕面市人権宣言20周年 学習会●

今年は、本市の人権宣言ができて20周年にあたります。その成立の経緯についてご紹介した前号(35号)を受け、箕面市人権教育推進会議が学習会を開きました。

人権宣言のころをもとに、今の社会や学校について話し合った内容を抜粋してお届けします。

八木会長 皆さんよろしくお願います。私は、社会の中の差別を減らし続けていくことや、個々の差別をなくすることはできても、差別という仕組みの総体をなくすることはできないと思っています。そのうえで、それを一つずつ減らしなくしていくためにどう行動していくかが肝心だと考える。みなさんはどうお考えか。

河野 障害者運動に関わってきて、障害というものを世の中の人に理解してほしいと願う一方で、完全に障害者が理解される社会など夢想だに思う。現実には、出生前診断でダウン症の子どもが中絶されるケースが増えている。社会的モデルとして障害者が認められていても、そういう子どもを産んだら社会的不利益をどれだけ被るかを知っているからこそ中絶する。そういう意味では差別は厳然としてある。

若狭 自分の子どもは社会性やコミュニケーションをとることが苦手なのだが、優しい心や愛情は計り知れないくらい大きくて、子育てを通じて、子どもに助けられていると感じている。障害があることに対し、悲壮感や大変というネガティブなイメージを持つ心が悪いと責めるつもりはない。障害のある人が身近にいない人は単に知らないだけなので、この幸せな気持ちをもみんなと共有したいと思う。

河野 家の中では何の不自由もない。家の扉を開けて外に出たとたんに、障害はいらぬという社会の側の圧力がかかる。若狭さんの感じていることを社会の人が理解するのは難しいが、少しずつでも偏見や差別をなくすることはできると思う。僕は障害者が働く事業所を運営して

いる。障害者が社会的に認められないのは経済力がないから。お金を持っていないから使えず、地域社会の経済の中に自分を位置づけられない。その現状にちよつとでもいいから風穴を開けたいと思ってやってきた。最低賃金を支払うのがやっとだが、障害者が地域で働くことが一定の風景になってきたと感じている。

八木 一方で、一昔前だと障害児とは言わなかったような子が、障害児と呼ばれるようになり、その数が最近とても増えている。

若狭 人のできることにそれぞればらつきがあるが、平均値を大幅に逸脱すると集団生活を送るうえでちよつと「めんどくさい子ども」になる。それで発達障害というカテゴリーになる。想像力を豊かに接すると非常に理解しやすいんだけど、そこまで一人の人のことに時間をかけられないので、「その子が社会に適応するために」という説明でもって、子どもの方を矯正しようということになる。学年が進むにつれ、そういうことを感じるが増えてきた。

上田 どの先生、どの学校も同じというわけではないと思う。直接接した先生によってすごくやり方が違う

ように感じる。そうでなくて、制度やシステムなどによって、どこの学校に行ってもだれが担当になっても同じような状況で受け入れてもらえるようになるべきだと思う。

松岡 箕面市は箕面子どもステップアップ調査など、教育にすぐお金をかけているが、人権教育、人権宣言を大切に、子どもたちの心も育ててほしい。ある授業を見ていたところ、落ち着いて学習できない子どもたちが何度も注意される場面があった。そういう子どもたちの気持ちや、なんで動いてしまうのか、なんで先生の言うことを聞けないのか。聞いてもらうためにどうしたらいいかということを考えられる先生や学校であって欲しい。

佐藤 一人ひとりが大切にされる学校文化を築くことに、多くの教職員が心を砕いているけれど、うまくいっている事例とうまくいっていない事例が(現場には)ある。また、箕面に限らず、障害のある子へのいじめ事象が問題になっている。学力ばかりが評価されるような風潮になると、勉強できない子がいじめられるという構図ができる。いじめ問題の責任の所在がだれにあるかといった責任論ではなく、本当の解決は、先生と保護者と地域が手を結ぶとこ

ろにしかない。地域や保護者の思いと学校を結び付け、解決の仕方を一緒に考える組織づくりやシステムづくりを各校園で進めている。

永田 宣言にあるように、愛すること、考えること行動することという機会を私たち大人が子どもたちとう味わっていくか。そのために多くの人がつながっていくことの大切さをこの宣言は言っている。

河野 学校は特別な空間に思うけれども、そこは保護者も先生も責任は半分ずつある。それぞれが話し合いながら責任を全うしていくことが大事。

八木 保護者と先生が責任をぶつ合っても仕方がないわけで、責任をつなぎ合わせる場が必要。住民教育委員会でもいいのか、それらしいものをつくればいいのでは。

永田 学校と保護者があまり重たなく、話ができる場があるといい。

八木 人間を否定することがらにまっすぐに向き合う...というところが肝要。不合理や差別は世の中に渦巻いている。それに異議申し立てできる力を育てることが重要だと思う。それが生きる力の非常な重要な部分だと思う。そのために教室、地

域の中で従来の人間関係をつくり直すことが必要。宣言を今の教育に重ねた時、みなさんが大切だと考えることは？

河野 人権は他者に関わっていく好奇心。それが大人にも子どもにも求められている。人に興味を持つこと。

松岡 『だれひとりとして「人権」を踏みにじられ、涙をこぼすことがあってはならない』とあるが、こういう人を見つけれれる、理解できる先生であってほしいと思う。

上田 人権問題は当事者に関わっている他の人が話さないと意味がない。人権を踏みにじるってどういう行為なのかについて、社会全体が鈍感になっているように思う。親が分かっているなければ子どもに伝わらない。宣言を久しぶりに読み返すと、松岡委員と同じ部分で勇気づけられた。味方がいるというか孤立しているのではないと感じた。人権はマイノリティのための言葉ととらえられていないか。人権は在日外国人や障害者のための言葉でなく、みんなに関係があるみんなが持っているもので、それにマジョリティが自分で気づけるようなことが必要だと思う。

永田 私も含めて「辛いなあ」とならないように毎日を工夫しよう考え



ようというのがこの宣言。すごく分かりやすい表現で、そういう情景が浮かぶ。自分が泣いているときにおかしいと考えられるきっかけになったらいいなあと思う。

河野 知らないことは罪だと思う。人の痛みを知ろうとする好奇心を持って人の痛みに近づいていくことが大切。

箕面市人権宣言

わたしたち、みのお市民は、みどり豊かなわたしたちの街をこよなく愛しています。この街に住み、この街で暮らすすべての市民が、だれひとりととして「人権」を踏みにじられ、涙をこぼすことがあってはならないと願っています。

わたしたちはそのために、引きも切らずに続く「にんげんを否定する」ことがらに、しっかりと向き合い、それをなくすために行動したいと考えています。このように、愛すること、願うこと、考えること、行動することは、みのお市民のたからかな誇りです。わたしたちのために、あなたのために、みんなのために、にんげんの街みのおを育てます。

日本国憲法のころ、市民の風で、ここ箕面市を「人権の街」として宣言します。

平成五年(一九九三年)十二月二十二日 箕面市

知ってる？市民のちから 「さんかくひろば」

新質面市人権教育基本方針のうたう「市民との協働による人権教育」を進めるにあたり、市内で活動する市民や団体を紹介するこのコーナー。今回は放課後等デイサービスを行う事業所「さんかくひろば」取材しました。



「障害のある人が自立するため、社会資源がまだまだ足りていない。子どもたちと関わるようになって、将来のことを考えると、このことをあらためて実感します。」と語るのは細谷さん。放課後等デイサービスさんかくひろばの管理者です。

「障害のある子どもたちや家族にとって、放課後の居場所は大変な課題でした。」と細谷さん。同じ問題意識を持つ障害児の親の会「スマイルシード」との出会いをきっかけに平成24年、放課後等デイサービスの構想を一気に加速、8月にさんかくひろばをオープンさせました。

立ち上げに当たって、様々な立場の人と協働で、理想の居場所について企画書を作りました。企画書の基本コンセプトは3つ。「みんなが集まるおもしろい場」、「やってみなければ

わからない可能性を見出す場」、「地域とつながる人となつがる新たな出会いの場」です。

中でも意識的に取り組んでいるのは3つ目、「障害者のための場所」という感じになりがち。支援する人とされる人だけでなく、もう少しいろいろなつながりをつくっていきたい。」とのこと。地域で使える子ども通貨「まーぶ」（34号掲載）を導入したのもそういった意図からでした。

さんかくひろばの特徴の1つは、常設のたこ焼き、子どもとの遊び、送迎など、多くの場面でボランティアが活動していること。ボランティアの多くは曜日を固定して継続的に参加しているので、子どもたちにとっても安心です。

日々の充実したプログラムも特徴的。「人と本を紡ぐ会」による紙芝居の上演、ビーズ細工や手品などは、ボランティアが中心となっていてます。ミシン、料理、お菓子づくり、柔らかな剣を使ったチャンバラ、大きなシャボン玉づくりなども人気のプログラム。「特性として興味の範囲が狭い子もいるので、企画する際には、何が面白いかをいつも考えています。」と細谷さん。

3つ目の特徴は、障害の有無にかかわらず地域の子とも利用できること。初めて来た子は障害のある子との接し方が分からないけれど、常連になると本当に上手に遊べるよう

●取材を終えて●

になるそうです。「地域とつながる、人となつがる新たな出会いの場」というコンセプトが、少しずつ形になっていることを感じさせられます。

今後の目標はここで関わった子どもたちが将来自立につながるというモデルケースを作ることだそうです。「既存の相談支援事業があることで、卒業後のケアプランを立てることが出来ます。一人ひとりの子どもとの長いスパンでの関わりを生かして、在宅介護、ケアホームといった次のステップと一緒に考えながら子どもたちを送り出していきたいです。」とのことでした。

数年前、ある会議で障がいのある方が懸命に話している内容がほとんど聞き取れず、とても緊張したことが忘れられない。ところが別の参加者は、違和感なく内容をとりえており、どうして私には聞き取れないのか、気になって落ち込んでいた。

「コミュニケーションは双方向だ。様々な個性と出会い、障がいがあるうとなかろうと、（遊んであげる、してあげる）ではなく、一緒に遊び、自分に出ることを手伝うことで、人はみなそれぞれに違った個性を持っていることや、相手の立場で考えることを、自然と学ぶことが出来るのだと思う。そうすれば、私のように大人になってから戸惑うこともないだろう。」

さんかく広場の説明を聞きながら、地域の子ともたちにとっても、障害のある子どもたちとこんな楽しそうな場所に出会えたら、きっとよい

細谷さんの言葉には、子どもたちへの愛情と、目標に向かって仲間と共に進むやりがい、力強さがこもっていて、私自身も元気を頂いた。

人権教育推進会議委員 上田晃江

考えてみよう

「カラッポの街、カラッポの学校、カラッポの……」

by・かわのひでただ

セミが鳴くのをやめた頃、どんどん高くなる空の下で、圭子ちゃんが、公園でポンヤリと考えることをしていました。

ウチのお母ちゃんがなあ、先週に、お友だちとな、子ども時分に住んでた、東日本大震災のあった福島県の南相馬市という街に行ったんや。そうやねん、原子力発電所の爆発事故で大変になつてる街や。その街に、お母ちゃんの子どものころからお友だちがいるから、お見舞いにな、行ったん。

そのお友だちは、南相馬の仮設住宅に避難してはんねん。それまでに住んではった、小高地区というのが、原発の放射能で住めなくなったからや。お友だちにお母ちゃんが会ったとき、「よう無事やったなあ。心配してたんで。」って、抱きおうて、ワアワア泣いたんや。その話をウチにしたと

きも、ポロポロ涙流してたわ。お母ちゃんがあんなに泣くとこ初めて見たよ。よほど悲しくて、嬉しかったんやろなあ。

そのお友だちに案内してもらって、お母ちゃんも知ってる小高の街を見に行つて。小高の街は、街ぐるみ、みんな避難してて、一時的に入ることはできるけど、泊まったり、住んだりはできないのやと。海沿いの道を車で行ったそうやけど、海がやっぱり子どものときに見たよおに、きれいやったそうや。

街に入ると、普通の街やねんけど、どっかへんなんや。家も、道も普通なんやけど、車は走ってへんし、人のすがたが見えへんねん。家はどこかしこも、カラッポ。それなのに、信号機だけがチカチカしてるねん。とっても淋しいカラッポの街。

街の中心の駅前に行くと、駅には電車が通ってへんで、自転車置き場の自転車雑草に埋もれて

た。線路は震災のときの津波で流されたまんま。やっぱりカラッポ。帰り道、お母ちゃんたちが子どものときに通った学校を見に行つたんや。学校に続く道路わきに、震災から2年以上もたったのに、津波に流された自動車がゴロゴロあるんや。

学校について、雑草のはえた校庭に、教室のある建物を見ると、建物にはたしかにあるのに、ここにも人がいてへん。子どもたちの姿も声も聞こえへん。学校もカラッポや。ってんで。

校庭のすみに、ブルーシートに包まれた小さい山があったんやけど、それは、校庭から放射能を掃除した土のかたまりや。そんなにしても、子どもたちがおれへんかったら、なんの役にたたないって、お母ちゃんのお友だちが、ポツンと言ったんや。

南相馬市から帰ってきたお母ちゃんは、ときどきポンヤリと考えることをするようになったん。それからフウってタメ息をつくねん。なにを考えてるんかなあ。よお分らん。

カラッポの街、カラッポの学校、いつ自分の家に帰れるのか分からないカラッポの将来。カラッポから抜け出そうとしているお母ちゃんのお友だちたち。お母ちゃんもカラッポになったんかなあ。圭子ちゃんは、北の方に視線を投げながら、

「カラッポの街、カラッポの学校、カラッポの心って、どんなやろ。原子力発電所はいるんかなあ。放射能はなんで怖いんやろか。」

と、圭子ちゃんの通う学校がある、自分の住む街やひとたちのことを、それこそポンヤリと考えつづけました。

そんな圭子ちゃんの影が、夕日の中で、長く、長くのびていきます。

★さあ、あなたは、どう思いますか。カラッポの街、カラッポの学校、カラッポの心を。そんなようになつたら、あなたは、どうしますか。みんなや、先生といろいろ話し合いましょう。東日本大震災を忘れないためには、どうすればいいのかなと。 オワリ